

マジックショウ

四百人の人間が眼をまるくして見詰める中で、何でも無い硝子コップの厚い底を五百円銀貨がネットリと通り抜けて下に落ちる。

演者のマリック氏に要請されて観客の一人が惜しそうに二つに破った一万円札の片割れは、たった今ライターで火を点けられて焔をあげ黒い灰になった筈なのに、少し離れた所に座って茫然としている別の観客の掌の中に綺麗に修復されて現れる。破れた、あるいは焼けた痕跡などどこにもない。驚いたことに一万円札の番号は先程破る前に皆で確認したのと同じで全く同一の札である。「超魔術」だという。

ある生命保険会社の創立記念の招待で「ミスター・マリック・ショウ」を興味深く見物した。約一時間、常識のひっくり返される不思議なことばかりであった。

演じられた不可思議な現象は近頃騒がれている「超能力」などではなくて、タネも仕掛けも十分に準備された巧妙な手品だという。「魔術」と称する所以である。

勿論素人にはどんなタネや仕掛けが用意されたのか判る筈もない。想像さえ出来ない。観客を装った「サクラ」が居るのかも知れないが、「サクラ」の助演の期待出来ない小規模で単純な手技ほど、どうしてこんなことが起るのか、あるいは出来るのか、という説明が難しい。例えば、睨みつけているだけで金属のスプーンをこともなげに曲げたり、ポトリと折ってしまうのにどんなタネがあり得るだろう。「ショウ」仕立ての余計な飾りを棄てて、起っている現象の本質だけを見れば、何か未知のエネルギーが働いてこれらの現象を起しているというのが、一番据わりの良い説明である。しかし、未知の作用を持ち出したのでは何かを説明したことにはならない。

タネも仕掛けもないのか、あるのか、素人には驚嘆するしかない「超魔術」を次々に見せられて大いに楽しませて貰ったものの、自分の想像力の貧しさに当惑し、苦し紛れにキワードは私達の「潜在意識」であって、観衆のそれをマリック氏は催眠かなにかの方法で操っているのではないかと私は疑った。勿論タネも仕掛けもあって、それも十分利用しているにしても、それだけでなく、ヒトは心の奥底では不思議を見たがっている存在だと悪魔的に割り切って、そういったヒトの心理の働きを巧妙に利用する何らかの方法を複合して使っているのではないかと思っただのである。つまりこれは「手品」だけではなく、敢えて言えば「手品」+「集団催眠」ではないだろうか。

催眠術と考えれば不可能なことは何も無い。催眠下では聖母マリアはおるか全能の神さ

え顕現する。

ただしこの催眠は、数百人の人間に同時に同じ期待を抱かせ、その期待に背かぬ現象が起きたことを最小限の言葉で全員に信じさせる殆ど超人的な能力がなければ成功はしないつまり催眠法の優れた能力を持つ者だけが出来る「魔術」である。その意味ではこれも一種の超能力であろう。どうやらこの能力は誰にでもあるのではなく一部の人々に限られているらしいけれど、ともかくヒトという種の中にはこんな特異な能力を持つ者があるのは事実らしい。

人間のこの「超能力」を「マリツク氏の超魔術」などのイベントに使っただけというのは勿体無い話で、もっとまじな利用の仕方はないものかと思う。小規模の催眠療法はあちこちで行われてはいるが、まだ一般的ではない。催眠療法をうまく使いこなせたら、例えば末期癌の人の甚だしい苦痛の原因になった「ガン」を、初めから「無かったことにすることさえ出来る筈である。

私は不思議さわる「手品」を見ながら思い付いた、ターミナルケアに催眠療法を導入するというアイデアに自分で興奮してしまった。

実は、私はヒトの手では到底曲げられない大きなスプーンが、見詰めるだけで鉛細工が溶けるようにトロリと曲がるのを見せられたことがある。また、投げ出されたスプーンが瞬時に、縦方向に針金を燃るように三重にも四重にも捻じれるのを見て、ヒトの意思が硬い金属に物理的な力として作用する現象を確かに目撃したと信じている。仕掛けの出来る状況ではない。

スプーンを睨んだだけで曲げることが出来る人に一体どうやるのかと尋ねてみたら、彼はただイメージするだけだという。つまり曲がった状態を思い浮かべているうちに勝手に曲がってしまうのだそうだ。当然本人も何故曲がるのかという理由は説明出来ない。

同じ人の「念写」実験も見た事がある。

量販店で買ってきたばかりのきつちり包装されたポラロイドフィルムの、しかも重なった中ほどから抜き出した任意の一枚をポラロイドカメラに入れておいて瞑目する。前額部に絵を思い浮かべているのだそうだ。暫くして引き出したフィルムには百合の花が写っている。あれですよと部屋の隅の花瓶を指されて見ると、なるほど百合が活けてある。シャッターには触れてないのでポラロイドカメラは撮影に使われたのではなくて、その場で現像して見せる為の道具だったわけである。その他東京タワーの夜景とかロンドンの二階建てバスだとか彼が適当に思い出すものが何でも出て来る。ただ写真と違っるのは画面の隅々まできちんとピントが合って写っているのではなく、彼の関心の対象になったもの以外はぼんやりしている。一枚の写真の中で時間の経過が違っ所があるかの様に、対象物がブレているのがいかにも夢の中の風景、或いは思い出の中の場面の感じで、まさに彼の「念」が具体化しているような気がして、私はそのことに感銘した。作為は無いと思った。当の本人が何故こんなことになるのかと不思議がっているのである。

スプーン曲げといい、念写といい、それ自体は何の役にも立たない技術(?)であるが、その発見の意味するところは重大で、現行の人間観や世界観が四次元宇宙の限界内での浅薄な知識を基にしたものに過ぎず、根底から引っくり返る可能性があることを示唆している。

硬い鉄が人の意思で曲がる「事実」が垣間見せている、物質と観念との関係が、そこで行き止まりになっているとは考え難い。恐らくその深奥には多次元の、人智を超えた宇宙が在るのであるが、残念なことに私達にはせいぜいのところ「超魔術」として見世物にする以外使いこなせないでいるらしい。

(五時通信 第二 四号 一九九二年十一月十日)